



思齊のしせい

大阪府立思齊支援学校 支援室だより

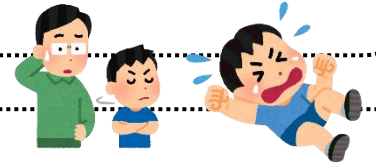
第48号

令和3年10月25日

「思齊のしせい」では、「愛着」について何度かお話をしてきましたが、今号より「愛着障害」についてお話ししていきます。今号の担当は高等部の竹内です。愛着障害について正しく理解、支援するためのヒントになればと思います。

【愛着障害とは？】

近年、「言うことは聞かないのに、文句や要求は多い」「してはいけないことを注意すると、余計その行動の問題が増える」といった「気になる子ども」が増えている状況があります。こうした子どもたちを理解する視点に、愛着の問題、愛着障害という視点が必要です。そもそも愛着とは「特定の人に対する情緒的絆」のことであり（愛着についての詳しい解説は「思齊のしせい」第42・43号参照）、この絆が育っていない問題が愛着の問題、愛着障害です。



【愛着障害の6つの誤解】

愛着の問題や愛着障害への誤解や偏見、タブー視は多く、先に述べたような「気になる子ども」に対して、正しいかわりが行われていない場合が多いのです。そこで、愛着についての誤解を「愛着障害の6つの誤解」として紹介します。

その1：産んだ母親の責任であるという誤解

産んだ母親が必ず愛着形成をしなければならないというわけではありません。父親や周囲の人も含め、誰かが母親機能を果たせばよいのです。



その2：育て方の問題という誤解

愛着は母子相互作用として捉えられるもので、愛着障害は関係性の障害です。親の育て方や子どもだけに問題があるというものではありません。実際、同じ親が同じ育て方をして、きょうだい的一方にだけ、愛着の問題が起こることもあります。

その3：親の養育を受けられない場合や、親から虐待を受けた場合だけに見られる現象という誤解

不適切なかわりとはいえない親の養育を受けた通常家庭の子どもが愛着障害を抱える場合もあります。

その4：愛着障害、愛着の問題は世代間伝達するという誤解

虐待でも指摘されるように、愛着障害の子ども親が愛着障害である事例はあります。しかし、適切な子育て支援の介入があれば、愛着障害の世代間伝達は防げます。



その5：愛着障害は取り返しがつかない、「もう遅い」という誤解

愛着形成には臨界期があり、生後1歳6ヶ月頃までに形成されなければ、その後に形成することはできない、という考え方が以前からありますが、それは間違いです。適切な愛着修復のかかわりをしていないから「もう遅い」と感じるだけで、愛着形成は生涯続くのです。



その6：他者による愛着修復支援が、親との関係を悪化させるという誤解

愛着形成は生涯1人の人とだけ結ぶ絆ではなく、肉親、恩師、親友など多くの人と結ぶ関係です。他者が愛着とはどういった関係であるかを子どもに経験させることで、親子関係が修復されやすくなります。